
晒し台の女

朱雀正浩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晒し台の女

【Nコード】

N0209B

【作者名】

朱雀正浩

【あらすじ】

晒し台に繋がれた女と少年の会話。女は少年に何を伝えたかったのだろう。少年は女から何を学んだのだろう。

10XX年

ローマ

「レムス、あんたにこれだけは云つときたいんだ。聞いてくれよ。あたいが若い時の話さ、まだ水に浸かったばかりで、右も左も分らない頃、只一生懸命やってただけで、要領のかけらも無かった。そんな時に、あたいを氣に入ってくれる、貴族の子息だという男が現れたんだ。あたいは柄にも無く、その男に惚れちまった。この商売じゃ御法度さ。誰にも云へやしなかった。未だ幼かったんだね。あたいは真剣だったよ。金持ちの王子さまだから惚れた訳じゃないよ。金に目の無いあたいだけど、あの頃は、未だそんなに腐っちゃいなかった。理由はもつと間抜けな事さ。

ある時、あたいがこんな事を云った事が在った。『この商売でお金を貯めて、エジプトへ行くんだ。こんな汚れた街は捨てて、エジプトへ行くんだ。』ってね。そしたら、その男が、『お前のその無邪気さが、何よりもお前の魅力だ。』って云ってくれた。それは、只世間知らずだって事だし、今考えりゃ反吐が出るようなクサイ言葉さ。でもそんな時は、嬉しくて涙が出たね。ついぞ枯れちまった涙が、こんな時ばかりは溢れて止まらなかった。

あたいには、その魅力って言葉しか耳に入らなかった。何だ、あたいにも魅力が在ったんだってね、女としてじゃなく人間としての魅力が在ったんだってね、そう思ったのさ。

あたいに魅力が在ると云ってくれる、そんな人がこの世にまだ居たんだ、そう思った時にはもうその男にイカれてた。

ハハ、間抜けな話だろ。でも解るよな、あたいのこの気持ち、誰だって自分の魅力を見つけてくれた人にはイカれちまうもんだろ。

これはあんたへの忠告だけど、あたいは汚い商売の中で生きてく為に、魅力をなくしちゃったけど、（生きてく為に、なんて言い訳だね、只自分で捨てちゃっただけさ。

「あんたは、変に良い男に成ろうとして、自分の魅力を無くしちゃいけないよ。何か、あんた最近笑顔が汚くなってるよ。あの家に養子に入って、奴等に哀訴してみせて、色々とふんだくってる内に、いつの間にか大事なものを、奴等に奪われちまってんじゃねえのかい。あたいは、あんたの素直な笑い方が大好きなんだ。どうでもいいけど、あれだけは取り戻しといて、それで二度と手放しちゃいかんよ。ん、解ったんかい。」

彼女は言葉を途切る、

「ちよつと悪いけど背中を搔いとくれ、こう縛り付けられてたんじや、手が届きやしない。」

レムスは云う通りに、彼女の肩甲骨が異様に飛び出た背中に回る。

「それにしてもね、何でこんなに無茶苦茶なんだよ、あたい等みたいに真剣に生きてる人間ばかりが、苦勞ばかりして、遊び人ばかりが良い目を見るんだからね。きっと神様も遊び人なんだろうよ。まあ、愚痴ってみても仕様がねえけど、あたいがどつかの聖人でも無え限り、こればかりはね。まあ、下ばかり見てるからだけどさ。」

レムスは彼女の伸び放題の髪に覆われた、汚れた背中を搔きながら、口振りからは想像もつかない、そのか細い身体に驚くと同時に、何かふと怒りともつかぬ寂しさを感じていた。

「ああ、それで、さっきの男の話だけどね。つまんねえ話だけど、結局しばらくして逃げられちまってね。後で分かったんだけど、貴族の子息っていうのも、みんな嘘だね。あの言葉も愛の何云々とか云う、流行りの本の中からのそのままの言葉だった。つまり奴等が得意の、女の落とし方の一つだった訳よ。で、あたいがあまりに真剣だったんで、重荷になっちまったんだろうよ。」

まったく男は恐ろしい生き物だよ。女つてのは、自分を飾り立てるのはうまいもんだけど、感情まではうまく飾れないもんなのさ。だから、何かの拍子に仮面を割られちまうと、すぐ感情まで脆く崩れちまう。

だけど男ときたら、みんなボードビリアンさ、時には喜劇、時にはキザに歌ってみせ、又ある時は悲劇で同情を誘うっていった具合にね。

しかも、感情の中の中まで演技で飾れちまう。

奴等が表す感情は全て演技、怒ったって笑ったって、仮面無しに表情を作って見せてるだけの事。きっと奴等自身、どれが本物の自分か、見当も付かなくなっているんだろうよ。

怒ってみても、その後すぐ“自分は本当に腹が立っているのだろうか”なんて考えちまって、結局恰好をつける為に、上手くその場をまとめるまで怒ってみせる。殴ってみせても、それも上手くまとめたい時の手段の一つさ、男の教科書にはそんなことばかり書いてある。あたいはいろんな男を見てきたけど、誰一人、素直な感情らしいものを見せた者は居なかった。

でも、そんな男の教科書も、元はといえば女が作ったもののさ。ロマンティックな幻想から、そんな演技と仮面に飾られた虚像の恋物語を夢見て、男の演技に縁取られた、夢の中の自分にうつとりしているからだよ。女つてのは何時でも悲劇のヒロインである自分に酔って、哀しい女を演じて見せちゃ、満足して喜んでいるんだ。それが男を舞台俳優に仕立て上げているのさ。

だって女の方が仮面を被って舞台の上に居るんだ、男だって女を射止める為には、立派に飾り立てて女と同じ舞台に上がらなきゃならないじゃないか。むしろ女の方こそ、男が演技をやめて、自分までが幻想の舞台から引き摺り下ろされるのを恐れているのさ。だから男も女も馬鹿だってあたしは云いたいんだよ。“飾り立てなきゃ生きていけないなんて馬鹿らしい”ってね。

その馬鹿らしさに気付くのが、みんな男でも女でも無くなってからなんだよねえ。だから、男も女もみんな馬鹿になる前の子供に戻りたいって云うんだろうよ。

結局、人生に於いちや、男も女も悲劇を演じたがっていただけの喜劇役者なんだよ。遠く離れて後から見て初めて、自分が如何に道化

師だったかに気付くのさ。あたいに云わせりや、そんな奴等の人生、それこそが悲劇だよ。だからこそ、あんたには馬鹿じゃない男になつて欲しいと心から思ふんだよ。

つまりね、あんたに云つておきたかったのはね。あたいがこの晒し台の上で、手枷足枷のまま死んだとしても、同情とか建前とか、そんな気持ちから涙を流したり、逆に、男らしさとか見栄とか、そんなもので涙を流さなかつたりするのはやめとくれつて事さ。

あたいが死んでも哀しくなきゃ泣かんでいい。

世の中には、あたいなんかよりももっと酷い、目に見えない手枷足枷に縛られて、目に見えない晒し台の上で四苦八苦して生きている、男と女がごまんと居るんだよ。

あたいは、あんただけはそんな晒し台の上上げたくないんだ。同じ晒し台なら、あたいのこの手枷足枷の方がよっぽどましつてもんさ。それに第一、こんな阿婆擦れが死んだんだ、嬉しかったら笑つたつていいよ。嘘の涙なんかよりよっぽどましだね。要は、男の教科書に載っている様な行動はするなよつて事。それなら、素直な嘲りの方があたいには合つてるんだ。簡単に云やあ、今涙を流しているあんたのままで居ろつて事さ。」

一カ月後、彼女は死んだ。

レムスの目には、一粒の涙も無かつた。

それを咎める者も居なかつたし、それを褒める者も居なかつた。

この一カ月の間に、彼に何かが起こつたのか、それとも彼女に何かが起こつたのか、それは誰も知らない。

只、彼女は死んで、彼は泣かなかつた。

それだけの事だ。

ああ、死すべき人間たちの苦難には、

何と多様な運命の道筋が何と多様な形があることが！

誰もその行きつく果てをいうことはできまい。

く
エウリピデス
く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0209b/>

晒し台の女

2011年1月16日09時47分発行